

毎日歌壇

加藤 治郎 選

爪のほすひとほなにかに導かれきれいなものをのせている 横浜市 大原 香花

△評▽ネイルアートを思った。陶酔するほどの深い美に導かれているのだろう。結句の5音でリズムを変えた。少しきめている。生活苦じっと手を見る人いたが俺は薬の山を見て

△評▽石川啄木である。思えば啄木の時代に薬の山はなかった。現代の光景を歌った。ひとりでもスワンボートに乗る君を繋ぎ止めたくて岸辺に立つ 大津市 世田 夏雪

あなたのこころながら飲むセイロンティー香のうすいのなまのかしら 伊丹市 噂野アンドウ

「経済の動きに参加したいです」、主治医に主張しているあたし 直方市 大石 聡美

夜道にためりあふチャウチンアンカウにチャウチン振つて盆歌をさるる 甲府市 村田 一広

この心とのそばに在るわたしが好きと思えば他のわたしがうつむく 八尾市 瀬戸口祐子

見あげれば見あげれば廃墟のようなパニーガールの明滅でした 花巻市 永汐 れい

缶ビール箱がいくつも積まれる尾鷲祭りの休憩場所 さいたま市 長谷川文彦

コンゴにて君を見つけて思わず誘うでも今千円しか無いんだっけ 横浜市 荒田絵里子

水原 紫苑 選

曼殊沙華人間みたいに群れていて散歩をすこし孤独にさせる ふじみ野市 雨雨雨汰

△評▽マンジュシャゲは詩歌人に愛される花だが、確かに群れて咲くことが多い。マンジュシャゲと人間とどちらが真に孤独か。水道の蛇口捻ればねっとりとなま温かい星の体液 古賀市 砂山ふらり

△評▽星の体液の薄気味悪さ。それを飲む人間のまがまがしさよ。死なないものと会話ができたとどうとわたりし王国が滅ぶまで 花巻市 永汐 れい

宝石のような総ルビといたる泉鏡花を読み進めおろ 千葉市 深海 泰史

死後最初目にする色ときみは言う午前三時の空をながめて さいたま市 雨谷 詩穂

足の裏に干からびた米粒が刺さる 人の心がなにかいる 京都市 小池ひろみ

死者を抱く八月逝きぬ今宵聴く夜の女王の復讐のアリア 名古屋 浅井 克宏

朝毎にわたしの脳筋で鳥語でしゃべる秋の女神は 東京 河野多香子

人魚娘が使わなかった剣のこと思ふ夜半の林檎の赤さ 松本市 飛 和

飛火野のきこに寝ころび空みれば落ちてゆきそらな空の青さよ 東大阪市 池中 健一

伊藤 一彦 選

民主主義人種差別を超えられず建国よりの業の根深さ 松戸市 加賀 昭人

△評▽かつて民主主義国と理想化していた米国の反民主主義的な社会の現実を「業」と詠む。改めて民主主義とは何かを問う。傷跡が少し残れば叩かれる人の世界を映し出す桃 駒ヶ根市 市山 利也

△評▽結句に「桃」を置いたのが見事。生きづらいつ一人の世界の苦を鋭く歌う。騙し討ち、寝返り奇襲、讒言の歴史書未だ完結できず 神戸市 高橋 峰子

血のような赤ペンの液が手に滲む 今日もお仕事頑張ってます 横浜市 朔月 七

山も揺れ大地も裂けた大震災あれから百年超高層たつ 川越市 小畔川 霞

一定の理解を得たと一定の支持率のひとが言っている処理水 名古屋市 田中 靖人

戦場の惨状伝える画面消え映し出されるコミケのにぎわい 前橋市 内山 征洋

野をゆけば秋は来てをりゆたかななる八木重吉の詩がひろがる 下関市 藤川 政美

ファミレスをトング片手にひとりゆくサラダの森の音子の冒険 ふじみ野市 雨雨雨汰

石棺に描かれた線刻は星座へ誘う太古への夢 名古屋市 たけなかけい

米川千嘉子 選

悪夢だった？現実だった 手作りのフェイスシールドプラゴミに出す 大阪市 小熊 光子

△評▽コロナ禍当初、慌てて作った物だ。今また感染者は増えているが、当時の緊張はウソのよう。上句の自問自答が印象的だ。何度まで耐えられるのか人類の命削りてこの夏もゆく 名古屋市 外山 雪

△評▽数年前は体温超えて驚いていたはず。人類の命削りては誇張でなく事実。をんなゆめいとも「副」の字つけられて補佐か飾りか をこの昭和 伊丹市 岡本 信子

やわらかい甘いが好まれる時代食、物だって人間だって 西海市 まえたいっき

シャンプーの香りが洗面所に満ちて息子の起床を知る午後三時 碧南市 江原 冬莉

世の中に「オレオレ詐欺」はあるけれど「ワタシワタシ詐欺」はあらぬ日本 国立市 佐藤 建

我にとりたつた一度の口ごたえ驚いてくれた父が恋しい つばは市 小林 浦波

秋を待ち生花にもとすと仏前に一言をえて造花の百合を 野田市 片倉 伸明

「パーマやさん行って来るねに和の子パーマつてなに、教へて」と言ふ 高崎市 樋浦マサエ

スマホ持ち産婆坂を大股で歩く娘たちのてる着物 姫路市 尾上とも子



そとのたんしー

投稿規定 はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます